

講演会 & ライブ な日々 ㉔

古川 秀明

スッポン

私が勤務する中学校で、スッポンが飼われている。

生徒がどこかで捕まえてきたものを、先生が育てて、みんなに公開している。

最初は親指よりちょっと大きいくらいだったのが、今では握りこぶしくらいに成長した。

私はこのスッポンという生き物がたまらなく好きだ。

フォルムが可愛いのもその理由だが、このスッポンは私が子供の頃のラッキーアイテムだったのだ。

こいつを捕まえると小学生の小遣いの数十倍の金額が手に入る。

スーパーマリオブラザーズのスターやコインなど、スッポンに比べればゴミ以下である。

テレビの前でチマチマとコントローラーを操作して、ゴールしてもほんのわずかな、にせものの達成感しか味わえないコンピューターゲームなどでは決して味わえない楽しさがある。

楽しさの秘密は2つある。

①捕獲する楽しみ ②親に依存せず、自分の力でお金が手に入る楽しみ。

スッポンは料亭の板前さんや反社会勢力の人たちが喜んで買ってくれた。

まさにスッポンは京都の下町貧乏クソ坊主達の、一獲千金を実現する夢の生き物だったのだ。

しかし、夢の生き物だけあって、なかなか捕まえない。

スッポンを捕獲する場所は二カ所。

ひとつは二条城のお堀で、もうひとつは神泉苑にある池。

二条城の堀でスッポンを捕まえるには、様々な難関を越えなければならなかった。

まず、基本となる捕獲方法は餌で釣り上げることだ。

餌はでっかいミミズ（ドバミミズ）で、土をひっくり返して捕まえる。

なるべく石垣の近くに餌を落とすのがポイントだ。

石垣は等間隔に積まれており、必ず積まれた石と石の間には隙間がある。

スッポンはそこに潜んでいることが多い。

しかし、スッポン以外のカメもたくさんいる。

いや、むしろスッポン以外のカメの方が圧倒的に多い。

100回くらい餌を落としても、石亀や泥亀、銭亀ばかりで、一匹も捕れないこともしょっちゅうだ。

しかもカメはよく針を丸呑みするので、その針を口の中から外するのが面倒になる。

しかし、そんな苦労よりももっと恐ろしい敵がいる。

それは警備員だ。

一定の間隔で、生け垣を乗り越えて、堀に近づくものがないか見回りに来る。

この警備員に捕まると結構厄介なことになる。

釣り道具を没収され、小学校に通告されるのだ。

通告されることには慣れていたが、釣り道具を没収されるのは何としても避けたいのだ。

この警備員対策には苦労した。

小学生の頭で考えられることなどたかが知れている。

一番簡単なのは見張り役を置くこと。

当時はもちろん携帯電話やスマホなど存在しなかったし、もしあってもそんな高価なものを買ってもらえるとはとても思えない。

そうなるとトランシーバーだ。

しかし、これも小学生の小遣いで買える品物ではない。

最後に残るのは、人力しかない。

警備員は必ず自転車で回って来る。

時間が決まっていればその時間を避ければ良いのだが、これが結構いい加減だった。

一日に何度も回って来る日もあれば、一回も来ない日もある。

となると、最後は見張りとなるが、警備員はなぜか必ず右から回って来る。

だから、竹屋町付近で捕獲するならば、見張りを御池通りに立たせておいて、警備員が回ってきたら大急ぎで自転車で知らせにくる手はずにした。

しかし、見張り役になりたい奴がなかなかいない。

ただ立っているだけなので、とてつもなく退屈な仕事なのだ。

真夏はとくに辛い。

そりゃ夢中になってスッポンを捕まえるほうが何倍も楽しい。

見張り役はじゃんけんで平等に決めるのだが、世の中にはじゃんけんにめっぽう弱い奴がいる。

仮にその人を A 君としよう。

A 君はたいていパーしか出さない。

そのことを見抜いていた僕たちは必ずチョキを出す。

一度や二度なら A 君も納得するが、度重なるとさすがに A 君も異議申し立てをする。

A 君「じゃんけんはやめて交代制にしよう」

誰も見張り役になどなりたくないの、多数決で即、却下。

A 君「それならあみだくじにしよう」

紙と鉛筆を用意するのが面倒だという理由で却下。

その日もじゃんけんに負けた A 君が見張り役をしていた。

そんなある夏の日、炎天下の中、ただ立っているだけに飽きた A 君は見張り役を放棄して家に帰った。

せめて放棄したことを僕たちに言って欲しかったのだが、彼は何も言わずに帰った。

そんな時に限って警備員がやって来る。

見張り役を立ててないときは最大限に注意をしているのだが、A 君にすべてを委ねていたのですっかり油断してしまった。

釣り道具は全部没収され、小学校に通告された。

翌日学校で A 君の行いについて僕たちは話し合った。

確かに何度も見張り役をさせられるのは辛いから、今回は許してあげようという意見でまとまった。

そのことを A 君に伝えると、彼はとても喜んでくれた。

A 君はお詫びに、今日だけは自分が見張りをやると言い出した。

僕たちは A 君に感謝し、放課後にまたスッポンを捕りに行った。

お金に目がくらんでいる京都の下町貧乏ガキどもは、一度や二度の失敗ではくじけない。

この力を勉強に向けたら、きっとみんな同志社や立命館中学に入れたらろう。

約束通り、その日は A 君が見張り役をしてくれた。

そしてその日、A 君に釣り竿を借りて、念願のスッポンを捕まえた。

しかもかなりの大物だ。

普通サイズで 500 円くらいで買ってもらえるが、このサイズなら上手くいけば 1000 円、いや 1500 円はもらえるかもしれない。

僕たちはすぐにスッポンをバケツに入れて、スッポンを買ってくれる反社会勢力のお兄さんのところへ行った。

彼はいつもカトレアという、パチンコ屋の隣にある喫茶店にいた。

スッポンが捕れたらすぐに持っていく約束になっていた。

彼がいないときは、喫茶店のママさんが代わりに買い取ってくれた。

ママさんは、髪の毛は金髪で、唇は真っ赤で、目の周りは青で、頬っぺたは真っ白だった。

その日はお店にいつものお兄さんはいなかった。

代わりに五色豆を顔にしたようなママさんがいた。

ママさんの名前はマリさんと言った。

このママさんに「マリおばちゃん」と言うと、すごくご機嫌が悪くなるので、必ず「マリのねえちゃん」と言わなければならない。

マリのねえちゃんはスッポンの大きさにびっくりしていた。

僕たちはどうか千円にはなりますようにと祈った。

マリのねえちゃんは僕たちの人数を数えた。

僕たちが3人であることを確認すると、レジをチーンと高らかに鳴らして500円札を一人に1枚ずつくれた。

僕たちは満足した。

しかもその日、マリねえちゃんは僕たちにメニューにある好きな飲み物を飲んで良いと言ってくれた。

僕たちは迷わず、声を合わせて「クリームソーダ」と言った。当たり前である。クリームソーダには飲み物+アイスクリームが付いているのだ。

僕たちは自分たちの成果にとっても満足しながらお店を出た。

やっぱりスッポンは幸運の女神なのだ。

上機嫌でお店を出た帰り道、僕たちはとても厄介なことに気が付いた。

すっかり見張り役のA君のことを忘れていたのだ。

僕たちは急いでA君のことについて話し合った。

見張り役も立派な仲間なので、もらった合計1500円は、A君にも分け前をもらう権利がある。

しかし、1500円を4人では分けにくい。

だけどやはりここは平等にしなければならない。

1500円を4人で割ると、一人あたり375円。

500円札が100円玉と10円玉と5円玉になることに、3人とも強い抵抗感があった。

できれば紙のお札を持っていたい。

友情と欲望に挟まれた僕たちは苦しんだあげく、ある事実を思い出した。

A君はついこないだ、見張り役を勝手に放棄した。

そのおかげで僕たちは大切な釣り道具を没収され、おまけに学校に通告されたのだ。

よく考えたらこの罪は決して軽くない。

しかし、一度はその罪を許している。

僕たちはA君を許し、再び友情を取り戻したのだ。

これは素晴らしいことだ。

だけど、それと引き換えに500円札が100円玉と10円玉と5円玉に変えられるのには耐えられない。

炎天下の公園で熱い議論が交わされた。

そしてついに僕たちは名案を思い付き、それを実行した。

僕たちは、とても残念そうな顔をして、A君が見張りをしている所へ行った。

そしてA君に、今日スッポンは捕れなかった。A君には暑い中、見張りをしてもらってとても感謝している。

そのお礼に、今日は駄菓子屋でA君の好きなお菓子を何でもおごってあげるから一緒に行こうよ、と誘った。

A君はとても喜んだ。

駄菓子屋に着くと、A君は塩せんべいとネコガム（フィリックスガム）とウルトラマンジュースを選んだ。

合計で45円だ。

A君はとても恐縮して、3つも買ってもいいの？と僕たちに聞いた。

僕たちは、A君の働きは3つくらいでは足りないから、あと3つ買っていいよと

言った。

A君はさらにとても喜び、僕たちに握手を求めた。

A君はひも付きの飴と、三色ゼリーと串ドーナツを買った。

合計6つ買っても、100円でお釣りが返ってきた。

感激したA君は、これからも僕がずっと見張り役をしてあげると言った。

二条城の大型スッポンに味をしめた僕たちは、もうひとつの捕獲ポイントである「神泉苑」にも遠征した。

神泉苑の池にはカメがたくさんいる。

カメがいるということはスッポンもいる可能性がある。
さすがに神泉苑の池で釣り竿を出すわけにはいかない。

神主さんに叱られるし、何より大型の錦鯉がうじゃうじゃいるので、そんなものが針にかかったら釣り上げるのが大変だ。

そんな手間なことをしなくても、神泉苑のカメは余裕で手づかみできる。

乾物屋で「麩」を買い（これは20円くらい）、それを池にまけば、いくらでもカメがやってくる。

カメと一緒に錦鯉も集まって来るが、こいつらは無視するしかない。

二条城の警備員のように、神主さんやお手伝いみたいな人が、たまに出て来て池を見回ったり、池の奥にある神社で何かの呪文を唱えていた。

狭い神泉苑の中で、見張りは意味をなさない。

そこで僕たちは、20円で買った「麩」をばらまき、集められるだけのカメをあつめ、誰かが来る前にその中からスッポンを選んで捕獲するという、極めて単純なやり方を思い付いて実行した。

この日、スッポンを捕獲したのはA君だった。

こないだのスッポンほど大きくはないが、まずまずの大きさだ。

僕たちは A 君をほめたたえた。

A 君はちょっと照れながら捕まえたスッポンを入れたバケツの中に手を入れた。

その時、A 君に不幸が訪れた。

スッポンを持ち上げようとバケツに手を突っ込んだ A 君の人差し指に、スッポンが噛みついた。

スッポンに噛みつかれると雷がなるまで放してくれないという言い伝えがある。

それを固く信じる A 君は真っ青になり、「痛い～！指が食いちぎられる～」と叫んだ。

僕たちは A 君を励ました。

夕方になったら夕立が来て、雷が鳴るかもしれないと言うと、A 君はとても夕方まで待てないし、それまでに指が食いちぎられる～と泣きながら訴えた。

スッポンの首をちょん切ればいいのかという意見も出たが、買い取りの値段が下がるかもしれないという意見が採用され、却下された。

そんなやり取りをしている間、A 君はパニック状態となり、はよ取って、はよ取って、痛い、痛いと訴え続けた。

僕たちは、以下のような人差し指のない A 君の生活を想像し、深く同情した。

- ① 鼻クソをほじる時に不便である。
- ② おしっこをするときにチンチンを出しにくいし、その結果、おしっこを漏らしてしまうかもしれない。
- ③ 銀玉鉄砲の引き金を引けなくなる。
- ④ 自転車のベルを鳴らしにくくなる。
- ⑤ 検便の時に、マッチ箱にうんこを入れるのがとても厄介になる。

この結論を聞いた A 君はますますパニックになり、もしスッポンを指から放してくれたら、今後どんな言うことも聞くと聞いた。

僕たちはこの言葉を待っていた。

今後スッポンを捕獲し続けるには釣り竿は不可欠だ。

その釣り竿が A 君の見張り放棄のおかげで没収されてしまっている。

釣り竿は結構高価なので、なかなか次の釣り竿は買えない。

もちろん親は没収の経緯を知っているので、新しい釣り竿を買ってくれるわけがない。

そこで目を付けたのが A 君のお父さんだ。

A 君のお父さんは魚釣りが趣味で、びっくりするくらい釣り竿を持っている。

もしできることなら、そのうちの 3 本を僕たちに譲ってもらえないか交渉して欲しいと A 君に言うと、そんなことならすぐにできるし、できるだけ上等な釣り竿がもらえるように頼んでみてくれると言ってくれた。

交渉が成立したので、僕たちは A 君とスッポンを連れて池まで行き、スッポンを絶対逃がさないようにしっかりと抑えながら、池の水の中にスッポンを入れた。

すぐにスッポンは A 君の指を放して、池の中に泳いで逃げようと必死でもがいた。

再びスッポンをバケツに入れた僕たちは A 君に、指はまだ手に引っ付いているか？と聞いた。

A 君は涙を拭きながら、人差し指を大事そうに見つめ、僕たちに感謝した。

後日、A 君は僕たちに釣り竿を持ってきてくれた。

よほど感謝していたのか、A 君のお父さんが優しいのか分からないが、とても上等な釣り竿だった。

スッポンは一度喰いついたら雷が鳴るまで放さないという、まことしやかな都市伝説がある。

はっきりと言わせてもらうが、真っ赤なウソである。

確かにスッポンは他のカメに比べて噛みつきやすい。

実際、僕たちも何度も噛みつかれている。

噛みつかれても大して痛くない。

というのも、スッポンには歯がない。

一度噛みついたら放さないイメージがあると、スッポンにはサメのような強力なギザギザの歯があるように錯覚する。

噛みつかれた時にパニックを起こし、スッポンを振り回したり、指を無理に抜こうとしたりするからケガにつながる。

一番簡単なのがスッポンを水につけることだ。

水に入るとなぜかスッポンはくわえているものを放す習性がある。

このことはスッポン捕りの名人と言われていた2歳上の上級生から教わった。彼は僕たちに、スッポンのいる場所、釣り方、餌の付け方、警備員の対策、噛まれた時の対応方法、換金の仕方、値段の交渉の仕方などを伝授し、中学生になると、スッポン捕りのような子供の遊びはもう卒業したと言って、さっさとパチンコとビリヤードに乗り換えた。

このように、スッポンに噛みつかれた時の対応方法を知っていた僕たちは、それをうまく利用し、再びA君の罪を許し、新しい友情を作り上げたのである。

バケツにスッポンを入れて、A君を含めた僕たち四人はまた喫茶店に向かった。

この日も反社会勢力のお兄さんはいなかった。

マリのねえちゃんは今度のスッポンはこの前のよりかなり小さいので、800円だと言って、一人に200円ずつくれた。

A君は大喜びだ。200円でも僕らの小遣いにすれば大きい。

だけど前回の500円札を経験している僕たちにはなんだか物足りなかった。

マリのねえちゃんが、またジュースをごちそうしてくれると言った。

今日もクリームソーダでいいの？と聞かれ、僕たちはうなづいた。

しかし、ここでA君があることに気付いた。

前回は大きくて……。今日もクリームソーダでいいの？……。

A 君が自分の疑問をマリのねえちゃんにぶつけると、マリのねえちゃんは親切丁寧に事実を話し、瞬く間に一切が露見した。

いくらトロい A 君でも事の顛末が理解できたようだ。

ははあん、それでこないだ僕に駄菓子屋でいろいろおごってくれたんやな。

A 君の目がみるみるうちに吊り上がって行った。

喫茶店を出ると、A 君は僕たちに話があると言った。

そのまなざしには鬼気迫る迫力があつた。

A 君は僕たちに以下の措置を取ることを宣言した。

- ① 今までのすべてを父親に話し、釣り竿を没収する。
- ② 先生やみんなの親にもこのことを話して、厳しく罰してもらう。

僕たちは以下の修正案を提示した。

- ① 前回のスッポンの分け前を A 君にも渡す。(ただし、駄菓子屋で使った 100 円は差し引く)
- ② 今回もらったお金の中から、みんなで 30 円ずつ、合計 90 円を A 君にお詫びとして渡す。
- ③ その代わりに、釣り竿はそのまま頂いて、先生に言うのもなしにする。

A 君は激しく抵抗した。釣り竿はとても高価なものなので、前回のスッポンのお金は全部自分がもらおうと言った。

前回の 500 円をほとんど使ってしまった僕たちは、粘り強く交渉を続けた。

- ① だいたい釣り竿が没収されたのは A 君が見張り役を勝手に放棄したからである。
- ② 親にこのことを話したとしても、自分たちの親はスッポンをお金に変えることについてはむしろ賛成しているので、いまさらそんなことを話しても意味がない。僕たち 3 人の親は、スッポンを換金することではなくて、警備員に見つかるといふ初歩的なミスについてのみ厳しく指導する人たちである。
- ③ もし A 君の宣言通りのことを実行すれば、今後僕たちは A 君と絶交しなければならないし、ドッジボールの時は A 君に集中してボールを顔面に当てなければならない。

- ④ 釣り竿に関して、お父さんに返せというのならそうするが、今までの話をすべてお父さんに話さなければならぬ。(A君のお父さんはとても厳格な人なので、スッポンをお金に変えていることを知ったら、恐らくA君は厳しく叱られるであろう)

A君はドッジボールに強く反応した。

球技全般が苦手なA君は、いつも僕たちのチームに入れてあげて、守ってあげているのだ。

悩んだあげく、A君は一人につき100円ずつと、今後の見張り役の免除を申し入れ、僕たちは了解し、和解が成立した。

僕たちは今貰ったお金の中から100円ずつをA君に渡し、仲直りのお祝いに駄菓子屋に行くことにした。

駄菓子屋に入ると、とんでもない奴がいた。

6年生の熊五郎だ。

身体がとても大きいので熊五郎というあだ名で呼ばれていた。

熊五郎は下級生がいると、必ずお金を巻き上げる。

この日僕たちはスッポンを換金して、結構お金を持っていたので、とてもまずい状況となった。

熊五郎はすぐに僕たちに気付き、ちょっと来いと言った。

ちょっと来いと言われて、素直に行けばどんな目に遭うか分からないので、僕たちは自転車に乗り、すぐに逃げ出した。

無事に逃げ出した僕たちだったが、A君だけがいなかった。

大急ぎで駄菓子屋に戻ると、A君が熊五郎に首根っこをつかまれていた。

金を出せという熊五郎に、A君も必死で抵抗していた。

今日はお金を持っていない、と抵抗するA君。

それならばそこでジャンプしてみろ、とネチコクからんでくる熊五郎。

ジャンプすればポケットの中の小銭がチャランチャランと音を出すので、お金があることがすぐにばれる。

駄菓子屋の外に引っ張り出された A 君はもはや半泣き状態だが、そんなことで許してくれる熊五郎ではない。

僕たちはすぐに作戦会議を開いた。

即座に全員一致で、可哀そうだが A 君は熊五郎の犠牲になるしかないという結論だ。

だいたいまごまごして逃げ遅れた A 君が悪い。

ここは見殺しにするしかない。

熊五郎の言うとおりに A 君がジャンプすると、チャランチャランとお金の音がした。

さっきのスッポンの売り上げも含めて 4 2 0 円が熊五郎に巻き上げられた。

意気揚々と駄菓子屋に戻った熊五郎は、さっそく大好物の黒棒を 3 本も食べていた。

こんな不幸な出来事は、京都の下町貧乏くそ坊主の間ではしょっちゅう起こる。

弱肉強食の世界は厳しいのだ。

A 君は泣く泣く自転車をこいで僕たちのいる公園にやってきた。

A 君は僕たちを見つけて、血相を欠いて、立ちこぎで、全力疾走で、鼻水と涙を垂らしながら、鬼の形相でやってきた。

泣きながらギャーギャーわめいているだけなので、何を言っているのか分からなかったが、たぶん A 君は、

「お前らよくも俺を見殺しにしたな！スッポンの時といい、何回も俺をひどい目に遭わせやがって～～！」

と言っているのだ。

僕たちはお金を出し合い、自動販売機のペプシコーラを A 君におごってあげた。

それを飲んだ A 君は少し落ち着いた。

ボコボコに殴られなかっただけでもめっけものではないか？と言うと、A 君は殴られてもいいから 420 円は取られたくなかったとうつぶいた。

その気持ちはよくわかる。420 円は大金だ。

しかし、熊五郎の腕力には到底かなわない。

ここはあきらめるしかない。

「だいたいお前らが俺を見捨てないで、みんなで力を合わせて俺を助けてくれたらよかったんちゃうんか！」と A 君はまた泣きながら訴えたが、そんなテレビドラマのようなお話にはならない。

何度も上級生に殴られたり、金を巻き上げられたりしている僕たちは、現実をしっかりと認識できるし、さっさと白旗を上げるのが得策であることを身に染みて学んでいた。

そんな現実主義的な僕たちにも、不幸はいきなりやってくる。

夢中で話し合っていた僕たちは、背後に熊五郎が近づいていたことに気が付かなかった。

公園のど真ん中で集まって話をしていたら、そりゃ目立つに決まっている。

いつもなら安全な公衆便所の上に登って話しをするのだが、この日は A 君の勢いに押されて、そんなことを考える余裕がなかった。

熊五郎は僕たちを一行に並ばせて、ジャンプしろと命じた。

スッポンのお金があるので、A 君以外はみんなチャランチャランとポケットから音がした。

熊五郎は残らず回収した。

僕たちがあんなに苦勞して捕まえたスッポンの代金を、熊五郎はあっという間に巻き上げた。

こんな理不尽な話・・・が京都の下町ではしょっちゅう起こっていた。

僕の仮面ライダーカードは、軽く数十枚巻き上げられている。

巻き上げた上級生の中に熊五郎もいた。

僕たちは夢の中で何度熊五郎を八つ裂きにしたか分からない。

それと同じくらい夢の中で熊五郎に追い回されたりもした。

熊五郎はまるで勝ち誇ったゴリラのように僕たちの自転車をけり倒し、僕たちに片っ端からビンタを食らわしたり、突き飛ばしたりした。

上級生の中でもこの熊五郎が一番たちが悪い。

その日の熊五郎は実にしつこかった。

何度も何度も僕たちを殴りつけた。

僕たちを1列に並べて「気を付け！手を後ろに組め！歯を食いしばれ！」と言って何度も笑いながらビンタを食らわした。

噂によると、熊五郎のお父さんが軍隊経験者で、熊五郎もこのやり方で父親に殴られているらしい。

熊五郎の弱い者いじめは、その八つ当たりなのかもしれない。

ビンタを食らわせた後、熊五郎は必ず「ありがとうございました」と言うことを強要した。

とうとう A 君がパニック状態になった。

僕もういやや、何でこんな目に遭わなあかんねん、と泣き叫んだ。

泣き叫びたい気持ちは僕たちも一緒だった。

だけど、どうしようもない。

ちょうどそこに自転車に乗った反社会勢力のお兄さんが通りかかった。

お兄さんは、スッポンのお礼を僕たちに言ってくれた。

お兄さんはここで何をしているのかと聞き、すかさず A 君が泣きながら事の顛末をお兄さんに告げた。

お兄さんは熊五郎からお金を取り上げ、今度この子たちに手を出したら、切り刻んでスッポンの餌にするぞと言った。

お兄さんのシャツの隙間から青い入れ墨が出ていたのを熊五郎も知っていた。

熊五郎は悪びれる様子もなく地面に唾を吐き捨て、自分の父親は土建屋でやくざの知り合いもたくさんいる、という内容の言葉をお兄さんに投げかけた。

その瞬間、お兄さんの平手が熊五郎の右頬をとらえた。

お兄さんは自分の左腕のシャツをまくり上げ入れ墨を見せながら、いつでも誰でも連れて来い、と静かに言った。

熊五郎は大声で泣きながら帰って行った。

何となく僕たちは、熊五郎のことを案外根性なしかもしれないと思った。

あれから何年経ただろう。

今は令和。

A 君は税理士に、B 君は反社会勢力の一員に、C 君はトラックドライバー、私はシンガーソングライター。

A 君だけが堅気な仕事に就いている。

思いがけず、勤務している中学校で飼われているスッポンを見つけ、懐かしい思い出がよみがえってきて、つらつらと長く書いてしまった。

今思えば実に野蛮な小学4年生だ。

松の木にロープを結び、二条城の石垣を下りて、一番下の石垣の間に手を突っ込んでスッポンを引きずり出すこともあった。

気分はテレビのキーハンターやコンバットや忍者部隊月光だった。

これは C 君の発案だったが、石垣の中に手を突っ込むのは、中に何がいるか分からないのでとても気持ち悪かった。

ロープで石垣を下りるのは簡単だったが、上るのが大変だった。

結構高さがあるので、手の皮がむけて、何日もひりひりしたが、赤チンかメンソレータムだけで乗り切った。

蛇がいることもあったが、私はその頃から爬虫類が好きで、蛇やトカゲの存在はとても嬉しかった。

蛇の子供を捕まえて、家で飼おうとしたが、母親がそれを見るなり大きな悲鳴をあげ、「あんさんが家を出ていくか、蛇を放り出すか、今ここで決めなはれ！」とすごい勢いで迫るので、泣く泣く二条城の林に返した。

せっかくこの蛇を子供のうちから飼いならして、大きくなったら、意地悪をする上級生に噛みつくように調教しようと思っていたのに、残念だった。

二条城の堀に転落することもしょっちゅうだった。

外から見てると、とても深く見えるが、案外浅いところが多い。

堀の底は泥なので、転落して怪我をすることはなかったが、ドロドロになった。

今、小学校でもカウンセリングをしているが、子供達は放課後になると、学童か放課後デイか学習塾に向かう。

何もなく家に帰る子は、すぐにスイッチなどのゲーム機で、フォートナイトや荒野行動、集まれ動物の森、スプラトゥーンなどに夢中になる。

どこにもスッポンの入る余地がない。

自然、生き物、友達、協力・・・スッポン捕りほど面白いことはないのになあ。

もしも二条城に行くことがあれば、城ばかり見ないで、ちょっとだけお堀を見て欲しい。

大きなスッポンが水の中から顔を出しているかもしれない。

スッポンを食べると元気になるという。

還暦を前にした今の私はスッポンを丸かじりしたい気分だ。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき